

財政政策は

庶民の豊かな生活のため

（ぶれない心は晩年まで）

自分の人生を歴史に記すとしたら、あなたは、いつのどの出来事を語るでしょうか。

由利公正が晩年語った回想録から、その信念を読み解きます。

由利は、明治33（1900）年、72歳の時、「史談会」の会長に指名されました。「史談会」は幕末から明治初期にかけての歴史を当事者が生きている間に本人に語らせることにより記録を残そうとした組織で、明治22（1889）年に設立されました。由利が選ばれたのは、由利が当時の長州閥政権に反対しており、歴史を後世に残す過程で、薩長中心の記述をできるだけ抑制してくれる、史談会メンバーにそ

うした期待があったからだといわれています。

史談会では、例会を重ねて速記をとおり、史談会速記録を発行し続けました。明治25（1892）年から昭和13（1938）年までの46年間、計411編が発行されています。由利は会長に就任する前から例会に招かれ、何度も証言していました。が、会長就任後はさらに積極的に発言しました。

由利の発言の根本は、現在の明治政府の財政は根本的に間違っており、自分が福井藩や明治元（1868）年の太政官札で試みた政策が正しかった。というものでした。明治26（1893）年1月に出版された由利の著書『迂拙草』で

も「天下未だ経済の道を講ぜず」と記し、自分が退いた後は、中央でも地方でも経済の道が行われていない」と現状を批判しています。

この由利の考え方は、由利が死去する前年の明治41（1908）年に出された「戊申詔書」に対する反応でも明瞭に示されました。戊申詔書は日露戦争後の国民の気風が華美に流れるのを警戒して、天皇が特別の詔を出したものです。由利といえども直接に詔を批判することはできないうので、政府を批判して詔の訓戒に反対しました。国民に儉約を強いるのは政策の誤り。財政政策とは生産と消費を助けて国民に豊かな生活をさせること」というものでした。

経済の根本は節約ではなくて殖産。師、横井小楠から教わった由利の「庶民のため」の財政政策の考え



由利公正肖像（59歳）
（三岡丈夫『由利公正伝』より）

方は、福井藩や明治新政府で活躍していた時代のみならず、生涯を通して一貫していたのです。

関連史料・ゆかりの地

横井小楠寄留宅跡



横井小楠肖像
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

由利公正が過去の功績で一番自信を持っていたといわれる福井藩の財政再建。それに大きな影響を与えたのが、熊本から福井に招かれた師の横井小楠でした。政治顧問であった際の寄留宅跡には現在、記念碑が建てられています。

【住所】福井市中央3-11-31（幸橋北詰）（JR福井駅より徒歩10分）